

中学校における不登校生徒に対する一般生徒の対応

矢澤 久史

現在の不登校の定義（文部科学省、2022）は、「何らかの心理的、情緒的要因、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため、年30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」とされている。

文部科学省（2022）による1991（平成3）年度以降の不登校生徒数の推移では、90年代に中学校では急激にその数が増加し、2001（平成13）年度にピークを迎えた。その後しばらくの間はやや減少傾向にあったが、2012（平成24）年度以降は現在まで、年々増加傾向が加速している。

一番新しい文部科学省の報告は、2022（令和4）年10月27日に発表された2021（令和3）年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省、2022）である。この調査は、2021（令和3）年4月1日から2022（令和4）年3月31日までの1年間についてまとめたものであり、中学校における不登校生徒の総数は163,442人（在籍者数に占める割合は5.0%）で過去最高であった。これは約10年前と比べると約2倍であり、中学校では40人学級の1クラスで2名が不登校である計算になる。

不登校生徒に対してどのような支援がなされているか、あるいは効果的な支援としてどのようなものが考えられるかに関して、これまで多くの研究が報告されている。それらの研究は、教員に対して調査を行った教員側の観点からの研究と、不登校生徒を対象とした生徒側の観点に基づく研究の2つに大きく分けられる。

教員側の観点からの研究として、小中高等学校教員290名に対する質問紙調査を分析し、不登校児童生徒の状態に応じた有効な支援方法について検討した山本（2007）がある。彼の研究では、自己主張ができない場合には学習指導・生活指導を行うと共に家族を支えること、行動・生活に乱れが見られる場合には関係を保つことに注意しながら生活指導を行い、登校を促すこと、強迫傾向が強い場合には校内の援助体制を整え、別室登校をさせると共に家族を支え、校外の専門機関との連携を図ること、身体症状が重い場合には児童生徒の気持ちを支えると共に、保健室登校をさせるなど校内の援助体制を整えることが重要であることが報告されている。

この山本（2007）の研究は、実際の不登校児童生徒を想起させて、教師の視点から有効と考えられる支援方法を明らかにしたものである。岸田（2012）は山本による不登校支援の分類に基づいて、教師が実際に行った支援と各支援の効果について調べている。その結果、実際に行われた支援では予防的支援の実施率が85.3%で一番高かった。予防的支援は、普段から児童生徒の不安や心配事の話の聞いたり、欠席の回数や休み方などに注意を払ったりするなどの、教育相談と欠席への配慮の内容が含まれていた。この予防的支援に、心的支援（実施率79.5%）、家庭連携

(76.4%)、登校支援 (64.8%)、成長促進的支援 (64.5%) が続いていた。

支援が成功した事例において特に効果が高かった具体的支援は、専門機関連携「病院や診療所と連携を図った」、家庭連携の関係維持「電話連絡や家庭訪問などを行った」、組織的支援の別室登校「相談室や保健室などで過ごせるようにした」・「居場所を確保するために個別の学習室を設けた」、組織的支援の校内援助源「相談担当や生徒指導担当の教師に援助を求めた」、家庭連携の家族支援「話し合いをしたり傾聴したりすることで、不安や焦りを抱える父母や家族を支えた」であった。

一方、失敗事例の中で特に効果が低かった具体的支援は、指導的支援の生活指導「社会のルールや規則などについて指導した」、成長促進的支援の授業改善「授業の中でのグループづくり、認められる場面づくり、発言のしやすさなどの工夫を行っていた」、登校支援の登校援助「目標を細分化し、段階的に学校に慣らすようにした」であった。

高信・下田・石津 (2013) は、実際に中学校の教員が不登校生徒にどのような支援を行っているかについて、139名に対し質問紙による実態調査を行っている。その結果、中学校の教員は家庭訪問や電話連絡、スクールカウンセラーとの連携など多様な働きかけを行っていた。教員からの支援として有効であったものとして最も多く挙げられたのは、本人に対する家庭訪問であった。これに保護者に対する家庭訪問、電話連絡、スクールカウンセラーなどとの連携、気持ちへの傾聴、友人関係調整が続き、家庭訪問を中心としながらも多方面からのアプローチが有効であることが示されていた。

以上の教員の観点からの研究に対し、実際に不登校を経験した生徒に対する調査に基づいた生徒側の観点からの研究も行われている。笠井 (2001) は、不登校生徒 (261名) が担任や友達に対して実際に期待している支援について調べている。担任からの間接的な支援としては「プリントなどの配布物を届ける」といった関わりをしてほしいと思っている生徒は6割を超えており、不登校生徒の多くは担任を通しての間接的な関わりを期待していた。それに対し、「もっと家庭訪問してほしい」は77.2%の生徒が、「もっと電話連絡をしてほしい」では62.9%が「そう思わない」と答えており、担任からの直接的な支援に関する期待は小さかった。一方、友達に対しては「そう思わない」と答えていたのは、「もっと自分の家に来てほしい」では62.3%、「もっと電話連絡してほしい」は58.7%であり、直接関係する関わりに対する期待は担任よりも友達に対して大きかった。

安原・進藤 (2021) は、中学時代に別室登校の経験がある2名の大学生女子に、それぞれ友人と教員からの良かった関わりと良くなかった関わりについてインタビュー調査を行っている。調査の結果、友人の良かった関わりは、「気が楽になる言葉をかけてくれた」、「話を聞いてくれた」、「一緒にいてくれた」など、親密性やお互いの理解が満たされるものが挙げられていた。良くなかった関わりとしては、「なんで遊びに行くのに学校に来ないのか」などの不登校や別室登校に理解がない対応であった。教員による望ましい支援としては、登校刺激を与えない関わりや普段と変わらず接してくれたことなどが挙げられていた。一方、教員による望ましくない関わりとしては、登校刺激を与え続けてくることやできないことを無理にやらせてきたり、不登校に理解を示してもらえないことも挙げられていた。

以上の笠井（2001）、安原・進藤（2021）の研究は、不登校生徒や不登校経験者が周りの支援をどのように捉えていたかについて検討したものである。生徒側の観点としてもう1つ重要であるのは、周りの一般生徒が不登校生徒に対してどのように考え、どのような対応をしていたか、またその対応が不登校生徒にとって効果的であったかを一般生徒の視点から検討することである。

不登校生徒も他の生徒と同様に同じ集団（クラス）に所属している。不登校生徒が欠席し始めた時、欠席が続いた時、再登校してきた時に周りの生徒がその生徒に対しどのように対応したかによって、不登校生徒のその後の登校状況に影響が出てくると考えられる。そこで、本研究では、一般生徒が不登校生徒に対してどのような対応を行ったかについて、できるだけ多くの事例を集め、その対応が効果的であった望ましいものであったか、マイナスの効果が示された望ましくない対応であったかを検討し、今後どのような支援に心がけたらよいかについて提案をすることを目的とする。

方 法

1. 調査方法

調査は2020年と2021年の2回にわたって、それぞれ大学2年生対象のある講義の最後に、「自分の小・中・高校時代を振り返って、不登校の子や欠席がちの子にどのように周りが対応していたかを思い出し、仲間としてどのような対応をしたらいいかについて自分の考えを書いてください」と指示をして調査用紙を配付し、翌週の授業開始前に提出してもらった。

倫理的な配慮として、調査用紙の配付の際に調査の目的について説明すると共に、無記名であり個人の同定はできないこと、提出は任意であること、書かれていることについては個人情報から分からないようにして講義の一部や研究論文として公表される可能性があることを伝えた。

2. 調査結果の分析法

2020年は受講生95名中88名、2021年は受講生98名中88名の合計176名分が提出された。提出された176名分について、小・中・高のどの時代における事例であるかを調べたところ、小学生時代が24事例、中学生時代102事例、高校生時代が27事例であった。なおそれ以外のものは時期が不明確であったり、具体的な事例が記述されていなかったことから、今回の分析からは除かれた。

中学校時代の102事例について、登校への抵抗が増してしまった望ましくない対応と、登校に結び付いたり登校の可能性が高まった望ましい対応に分け、それぞれの事例が持つ共通性によって分類した。その結果、望ましくない事例では、不登校に対する知識不足による偏見や特別視が5事例、別室（保健室や相談室）登校や行事のみに参加する生徒に対する否定的な対応が6事例、登校してきた時の対応の悪さが8事例、関わりの減少に伴い徐々に疎遠になったものが7事例の合計26事例であった。これに対し、望ましい対応では、特別扱いをすることなく周りによる自然な対応と声かけが20事例、別室登校や行事のみに参加する生徒に対する声かけや自然な対応が17事例、登校してきた時の自然な対応が8事例の合計45事例に分けられた。なお、以上

の分類に入らなかった残りの31事例には、親の対応やカウンセラーによる対応など生徒による対応ではなかったものなどが含まれていたが、今回は生徒による対応が示されている事例に限ることとした。

また、ページ数の制限からすべての事例を掲載することはできないことにより、類似した事例についてはやむを得ず掲載を省くこととした。本論文の結果の部分に掲載する各事例は原文のままを原則としたが、「クラスの先生」、「クラス担任」などの複数の表現が用いられているものは「担任」に統一するなど、用語の統一を図った。また、文章が分かりにくい部分については必要最低限の修正を行った。

結 果

1. 不登校に対する望ましくない対応

(1) 不登校に対する知識不足による偏見や特別視（4事例）

不登校に対する望ましくない対応として、周りの生徒が不登校に関する知識が不十分なことから、不登校に対し否定的な見方や偏見を持ち、不登校生徒を特別扱っていることが挙げられる。

事例1と事例2は共に不登校を経験した本人のものであるが、「ズル休みをしている」と言われる（事例1）、からかわれるような目で見られる（事例2）など、周りから不登校について特別視されていること、不登校について理解してもらえないこと、不登校が原因で友達が自分と距離を置くようになったことなどが語られている。

不登校生徒に対して「自分勝手」など悪口を言う（事例3）、質問攻めをする（事例4）など、不登校に対する偏見や認識不足による対応の悪さも述べられている。

①事例1：本人、不登校に対する特別視、悪口

『中学2年生の時に自律神経失調症になり、朝は起きたくても起きられず、2時間目から学校に行ったり、1日動けず欠席したり、部活でも元気な時のようには走れなくなった。その時に部活もクラスも同じであった男子に「ズル休みをしている」などと言われ、自分の状況を話しても否定されていた。部員の中には病気を理解して毎日サポートしてくれる子もいたが、否定的な意見を言う子もいて、それがとても辛く「なんで分かってもらえないのだろう」と毎日頭を悩ませていた。』

②事例2：本人、不登校に対する特別視、友達が離れる

『中学生の時にクラス内の人間関係が原因で欠席しがちになり、保健室登校をしていた。不登校になったことで、「あいつは不登校だ」とからかわれるような目で見られている気がして辛かった。今まで仲良くしていた友達も減ってしまい、その理由が不登校の子の友達だと思われたくないと考えたからではないかと落ち込んでいた。』

③事例3：悪口を言われていることを知る

『中学校に不登校気味の子がいた。自分とはあまり関わりがなく、話したこともない子だったため、不登校になった理由も初めは知らなかった。しかし、友達がその子の話題をしていたので話に加えてもらおうと、内容の大半はその子の悪口だった。「自分勝手」、「何様?」、「クラス全員の悪口を言ってるらしい」など散々な言いようだった。自分が周りから悪口を言われていることに気づいたのか、その子是不登校になる以前よりも周りのことを気にして、居心地が悪そうだった。』

④事例4：不登校の認識不十分から質問攻め

『中学校2年生で最初は学校に来てみんなと楽しく授業を受けたり遊んだりしていたが、夏頃から登校しなくなった子がいた。周りには不登校というものをあまり認識していなかったことから、その子が登校してきた日には「なんで休んでいるの?」、「なぜ学校来ないの?」などと質問攻めしていた。友達として一緒に遊びたいと思う気持ちから悪気なく質問をしていたとも考えられるが、その子にとっては負担であったように感じた。』

(2) 別室（保健室や相談室）登校や行事のみに参加する生徒に対する否定的な対応（5事例）

登校しても教室に入ることができない生徒に対する支援として、保健室や相談室などの別室登校がある。また、通常の授業日には欠席を続けている生徒が運動会や修学旅行といった行事には参加してくるという「行事型登校」をすることがある。

別室登校や行事型登校をしている生徒に対して、保健室登校は良いことなのか（事例5）、自分たちは毎日登校しているのに、その子たちは楽しい時だけ参加していて「ずるい」（事例6）、「勉強しなくていいからいいな」（事例7）、「さぼりである」（事例8）、「仮病である」とか「休むのは甘えである」（事例9）というように、否定的に捉えていることが分かる。

⑤事例5：行事型登校や保健室登校を批判

『中学校の時、保健室登校をしている子がいた。その子は修学旅行や運動会などの行事には参加していた。周りからは「行事に参加するなら授業にも参加した方が良くないではないか」、「保健室に登校して授業を受けずに先生と話しているだけなのは良いことなのか」などの不満の声が挙がっていた。』

⑥事例6：行事型登校に批判的な声

『中学生の時に普段は登校しないのに、行事のある日にのみ学校に来る子がいた。クラスのほとんどの子は行事の有無に関係なく毎日休まず学校に来ていることから、行事や楽しい時だけに参加する子に対しては厳しい意見があり、「また行事だから来てるんだ」、「ずるい」などの批判的な声が多かった。周りにはあからさまな態度をとるようなことはなかったが、その子は「自分はあまり歓迎されていない」という雰囲気を感じ取っていたようだった。』

⑦事例7：行事型登校に対して偏見

『中学校の時、修学旅行や遠足、運動会などの行事には参加する不登校の子がいた。その子に対し、周りには楽しい時だけや自分のやりたいことがある時だけ来ているという偏見を持っていた。その子は普段は教室に来ることはなく保健室登校をしていたが、養護教諭の手伝いなど行っている姿を見て、まわりは「勉強しなくてよいから不登校はいいな」などと話していた。』

⑧事例8：特定日だけ登校することにに対し悪口

『中学校2年生の時、週に3日ほど休むが特定の曜日にだけ登校する子がいた。特に仲が良い子ではなかったため、「今日も来ていないなあ」、「どうしたのかなあ」と気にはしていたが、話しかけたり話を聞いたりしたことはなかった。クラスの一部の子は「あの子、この曜日だけ来て他はさぼっているよね」と言ったり、さらにはその言葉を本人に聞こえるように言ったりする子もいた。中学生にとって「不登校」はさぼりというイメージが強く、悪い印象が強かった。』

⑨事例9：仮病を疑う部活の仲間からの冷たい視線

『中学1年生の時ほとんど休まずに登校していた同じ部活の女子が、2年生になり学校も部活もほとんど休むようになった。彼女と仲が良い子に理由を聞いても、何も分からないということだった。1ヶ月に1度ほどしか部活にも来なくなり、たまに参加したとしても「体調不良」という理由で見学をしていた。

体調不良ということではあったが、友達と元気に話す姿もあった。部活のメンバーは疑問に思いながらも「どうせ仮病でしょ」とその子に対して向き合おうとせず、「休むのは甘えであり、ズルイ」という考えから冷たい視線を向けていた。』

(3) 登校してきた時の周りの対応の悪さ（7事例）

不登校の生徒が、登校を再開したときに周りがどのような対応をするかが、その後に登校が維持できるかどうかに関係してくる。事例10～14で共通に示されているのは、欠席が続いている子が登校した時に周りがコソコソと話をしたり（事例10、13）、変にざわついたり（事例11）、騒がしかったのが一気に静かになったり（事例12）、ありもしない噂を面白半分に確認したり（事例14）というように、その生徒を特別視するような雰囲気を作り上げ、登校してきたことが逆効果となってしまったことである。

事例15では、登校してきた時に周りが悪気がなくかけた言葉にうまく自分の気持ちが表現できなかったことから、周りとの関係がうまく築けなかったこと、事例16ではたまたま休んだことが大きく取り上げられたことによってその後の登校が難しくなったことが示されている。

⑩事例10：再登校初日に周りの冷たい対応

『同じクラスに不登校の女子がいた。不登校になって約1か月後に登校を再開したが、再開初日に教室へ入ってくると、周りの子は一斉に視線を女子に向け、こそこそと話し始めた。このような雰囲気はさらに「学校へ行きたくない」という気持ちを作り出してしまうと感じた。』

⑪事例11：周りの無関心、再登校日における周りの対応の悪さ

『中学校の同じクラスに不登校の生徒がいた。以前から関わりのある子ではなかったので、あまり干渉せず過ごしていた。私は学級委員だったが、その子が登校した時は学級会での話し合いの結果を伝えるだけで、必要以上に話しかけたりはしなかった。周りの子の反応も冷ややかな目でその子を見ていることが多かった。久しぶりに教室に来た不登校の子が髪を染めたり雰囲気が変わっていたりすると、悪気はなかったと思うがクラスがざわついていた。』

⑫事例12：友達からの否定的な言葉かけと登校時における特別な雰囲気

『中学1年生の時、友達の子が夏休み明けから少しずつ学校に来なくなった。徐々に休み始めた時、クラスの子は「どうして学校に来ないの?」、「今日は来たんだ」、「もしかしてずる休み?」などと嫌味を含んだような感じでその子に聞いていた。また、その子が教室に入ってきた途端に視線を送ったり、騒がしかったのが一気に静かになったり、周りでコソコソと話をしたりなどという姿が見られた。その子は私と同じ班だったが、不登校気味になった途端あまり話さなくなり、中学1年生の3学期以降は1度も学校に来なかった。』

⑬事例13：登校時のコソコソ話

『中学校では不登校の子に自分から話しかけるといことはなく、話しかけられたら他の子と同じように話すという感じだった。不登校の子にあまり話しかけない方が良いという気持ちが強かった。私のクラスでは不登校の子に対して目立たいじめがあったわけではないが、不登校の子が登校した時に「何で休んでいるのだろう」、「何で今日は来たのだろう」とコソコソと話していることが見られた。』

⑭事例14：級友による批判、噂、登校した時の対応の悪さ

『中学校の時、クラスに不登校の子がいた。周りは「学校を簡単に休むなんて」や「居場所がないからしょうがない」とか、さらには相手の知らない家庭環境のことを悪く言ったりしていた。本人がその場になかった時には、ありもしないことを周りに流し、その子に対する偏見がすごかった。また、勇気を出して久しぶりに登校してきた時には、噂が本当なのか面白半分で確認したり、「楽でいいよな」と言ったりする子もいた。』

⑮事例15：心配でかけた質問に対しそっけない返事から周りとの関係悪化

『同じクラスに休みがちの子がいた。始めの頃はよく休む子だな、体が弱いのかななどと考えていたが、季節が過ぎるにつれて学校に来るよりも欠席する回数の方が増えていった。学校に来る場合には昼過ぎの授業からの登校が多かった。登校したときに周りがその子に「体調不良、大丈夫?」などの声をかけていたが、「別に何でもない」というそっけない答えしか返ってこなかった。心配して聞いたのに感謝の言葉もないことからとても腹立たしい気持ちになり、その子が休むことを心配して気を遣って話しかけていた子たちも「話の話題が合わない」などのことから、次第にその子に対して何も聞かなくなり話しかけなくなった。休む頻度が増えるにつれて声をかける子もいなくなり、そのうちにその子はまったく登校しなくなった。』

16事例16：何気なく休んだ最初の日に周りが大げさな対応

『中学の時、誰も話さないでいつも一人でいる子がいた。その子は休み時間になると本を読んでいたが、日が経つごとに学校を休み回数が増え、そのうち学校に来なくなった。いじめられているような様子はなかったし、小学校からいっしょの仲の良い友達もいて、こちらから声をかければ話してくれるため、本が大好きだから一人でいるのだと思っていた。』

彼女に何があって学校を休みがちになってしまったのか分からず、担任も同級生も理由を知ろうと聞き出そうとしていた。私たちは彼女のことが心配で力になれることがあればと思い、声をかけ続けた。しかし、彼女にとってはなんとなく休んだ一日だったのにも関わらず、周りが大きなお世話をかけたために、登校しづらくなってしまったようだった。周りがいつもと変わらない接し方をしていたら、それまでのように学校に来ることができていたのではと思う。』

(4) 関わりの減少に伴い徐々に疎遠に（6事例）

事例17は、不登校生徒に対し最初から無関心で関わらなかったケースである。事例18から20は、最初の頃は話題には挙がっていたものがそのうちにいないことが当たり前になったり（事例18）、不登校に対する偏見から関わりを避けるようになったり（事例19）、気を遣う態度が裏目に出てよそよそしくなり、腫れ物を扱うようになっていった（事例20）というように、不登校生徒に対しどのような対応が良いのかが分からなかったことから関わりが減少し、それが結果的に不登校の生徒と疎遠になったものである。事例21と22は周りは何らかの対応を試みてはいたが、それがうまく運ばず、次第に疎遠になっていったものである。

17事例17：周りの冷たい対応と無関心

『中学校の不登校生徒には周りの対応は冷たかった。気が合いそうな子に対して担任が「一緒にいてもらえる？」や「たまにおしゃべりしてもらえない？」と声をかけていた。しかし、周りは不登校で来ていない子に対して何にも反応を示さず、来ていないことに対して何も興味を持っていなかった。その子がたまにクラスに来て、話しかけることなく1日が終わっていった。』

18事例18：最初は話題に挙がっていたが、徐々に疎遠に

『中学1年生の時に班に不登校の子がいた。入学式に来て以来、教室に現れることがなかった。出身小学校が違い、中学校で初めて出会ったため、どのような子なのか分からないまま会う機会がなくなってしまった。当時は自分も慣れない中学校生活に必死で、学校に来ない子に対して心配な気持ちはあったが、何も行動することが出来なかった。』

クラスでも「最近学校来てないね」と最初のうちは話題に挙がっていたが、時間が経つにつれて話題になることも少なくなった。次第にその子がいないクラスが当たり前のようになった。みんな心のどこかで気にかけていた部分はあったと思うが、その場（クラス）にいない子に対してどのようにアプローチをすれば良いのかが分からなかった。』

19事例19：対応方法が分からないことから、関わりを避けるように

『中学校で不定期にしか登校しない子がいた。登校しても給食だけ食べて帰ったり、1日の最後の授業だけを受けて来るだけで、丸1日をクラスと一緒に過ごしたことはなかった。運動会や球技大会、テストなど学校内の大きな活動には常に担当の先生が隣について参加していた。学校に登校した時には「学校に来た」という珍しい光景が集まった。「好きな授業だけ受けて帰るのはずるい」という思いを持っているクラスメイトはいたが、誹謗中傷やいじめを行うことは一切なかった。』

しかし、クラスメイトは不登校に対する偏見も持っていて、話しかけや一緒に行動するなどその子と関わろうとすることはなかった。何か話しかけたら嫌がられるのではないかと、怖がられるのではないかと不安があり、自分を守るためにその子との関わりをなくしてしまっていた。中学を卒業するまでその子の声をあまり聞かず、関わりを持つことはなかった。』

㊸事例20：対応が分からず気を遣うのが裏目に出て、次第によそよそしく

『中学2年のクラスに学校を休みがちで相談室登校をしている女子がいた。なぜ教室に登校しづらくなったのかは分からなかった。いじめられていたという話も聞かなかったため、皆目見当がつかなかった。それは周りのクラスメイトも似たような状況であり、推測で性格が繊細過ぎることが影響していると思われていた。何に対して悩みや葛藤を感じているかもまったく見当がつかないため、同級生たちはどう接すればよいのか分からなかった。次第に気を遣う態度が裏目に出てよそよそしくなり、腫れ物を扱うようになっていった。このような態度を周りから拒絶されていると捉えてしまったのか、さらに居心地の悪そうな雰囲気が出ていて、教室に来る頻度はさらに低くなってしまった。』

㊸事例21：始めは対応が行われていたが、徐々に無関心に

『中学2年生の時、同じ部活の子が不登校になった。1年生の頃は毎日明るく学校に来て部活にも参加し友達も多かったが、2年生になってから少しずつ学校に来なくなった。

欠席がちになり始めた時には、学校を休んだ日に同じクラスの友達と連絡をしていたが、学校に来ない日何日も続くで連絡する回数が減った。学校は休んでも部活には参加していたため、同じ部活の仲間はその子に対し今までと同じように接していた。学校を休んだ日にはクラスの友達と同じように連絡をしたり、部活で「また明日学校来てね」と声をかけたりしていた。しかし、途中から部活にも参加しなくなり、始めのうちは連絡をしていた子も徐々に連絡をする頻度が少なくなっていった。』

㊸事例22：対応は行われていたが関わりができなくなり、疎遠に

『中学生の時、近所の子が不登校気味になった。家が近くて幼馴染であったので、最初のうちはお便りを渡しに行くついでにその子と話をしていた。学校に行きたくない理由は人間関係にあると思ったので、学校の話題は避けてゲームやテレビの話をしていた。しかし、徐々に不登校が続くにつれて完全に学校に来ることがなくなり、お便りを渡しに行こうとしても家の中から返事がないためポストに入れるだけとなった。自分一人では対応できなくなったが、先生に相談することもしなかった。』

2. 不登校に対する望ましい対応

(1) 特別扱いはすることがない周りによる自然な対応と声かけ（7事例）

事例1から3は不登校を経験した本人のものであるが、どれも不登校であるということによる特別扱いを周りの生徒から受けることなく、「部活の仲間」として見てくれたり（事例1）、休むことに対して否定的な言葉をかけるのではなく（事例2）、以前と変わらない言葉かけなどの対応（事例3）をしてくれたことが示されている。

不登校になっても周りがこれまでと変わらずに友達としての対応を続けることが重要である（事例4）。最近の出来事や学校であったことなどを話す相手になったり（事例5）、SNSによるやり取り（事例6）、仲の良かった子がメッセージや配布物を届けに行き話をしたり（事例7）など、何らかの関わりを持つことによって不登校生徒が周りの生徒と繋がっていることが示されている。また、友達としてあえて不登校の理由を聞くことはしない（事例6）ことも重要となる。

①事例1：本人、部活には参加、自然な対応

『中学生の時にクラス内の人間関係が原因で欠席しがちになり、保健室登校をしていた。しかし、平日の夕方や土日にある部活動には参加できていた。友人は私のことを「不登校の生徒」ではなく「部活の仲間」として見てくれていたように感じ、自分の居場所があるということがわかってうれしかったし、安心することができた。友人と楽しく部活ができることで教室に行けなくても孤独ではなかった。「いつ教室に戻ってくるの？」と声をかけてくる人も少なく、自分のペースで学校に通うことができた。』

②事例2：本人、友達による声かけと周りの支え

『中学校で理由もなく学校に行きたくない時がたびたびあった。学校が近づくとお腹が痛くなったり、頭痛があった。休むことも何回かあったが、学校に通い続けることができたのは友達のおかげだった。休むことに関して否定的な意見を言うのではなく、「たまには休むことも大事だよ」と言ってくれた。休んだ日には班の子が次の日の予定を書いて届けてくれ、そこには班の子だけでなくクラスの多くの子から「また〇〇して遊ぼう」と書いてあり、元気づけられた。私の場合は周りの支えがとても大きかった。不登校の子に対する関わり方として、否定的な発言をしない、学校の話はしないことは大切だと思う。』

③事例3：本人、登校した時に友達による自然な声かけ

『中学校1年生の時になかなか学校に行くことができなかった。1日休むと次の日は行こうと決意するのだが、次の日になると体が拒否し、また行けなくなる。これが1週間続いた。同級生が私を好奇の目で見ていると思え、教室に入ることができなかった。登校した時でも教室に入る時ドキドキしながら入っていた。

ある時、私とはあまり話したことがなかった子が、「おはよう。元気？」と私が休み続けていたことを気にしていないように話しかけてくれた。この言葉のおかげで「誰も私を好奇の目で見ていない。気にしていないんだ。」と思えた。この言葉があったため、私は教室に入ることをためらわなくなり、同級生の子とも楽しく会話できるようになった。』

④事例4：普段通りの対応、「学校に戻ってきて」とは言わない

『小学校から仲が良かった友達が中学1年生の時に登校をしなくなった。不登校であっても友達として変わらないと考え、これまで通りに接した。また、「学校に戻ってきてほしい」とは絶対に言わなかった。勉強が追いつけるようにノートを貸したり、「気分転換と一緒に遊びに行こうよ」と遊びに誘ったり、「一人じゃないよ、そのままでもいいじゃない」などと言葉をかけた。

その子から「なんで私が不登校の時に不登校の話題や自分が不登校になったことに関していろいろと聞かなかったの？」と尋ねられたことがある。私は「友達だからそんなこと関係なくない」と答えた。友達は少し涙を浮かべながら「不登校に関係なく普通に友達として関わってくれることが本当にうれしかった」と言った。また、友達は「そのままでもいいじゃない」と言われたことで自分自身の存在を認めてもらえたような気持ちになり、前に進もうとする気持ちが湧いてきたと話してくれた。』

⑤事例5：対応が分からなかったが、友達として話し相手に

『幼稚園から仲が良かった友達は、不登校気味で時々しか学校に来なかった。どう接することが正しいのかわからず、登校した日の休み時間に話しかけに行くことしかできなかった。不登校の理由が分からなかったというより、聞くことでその子を傷つけてしまうのではないかと思い、理由を聞くことを躊躇していた。

その代わりに日常のことについて話し続けた。最近起きた出来事、昨日見たテレビ番組、その子の好きなアーティスト、共通の好みなど、とにかく淋しい思いをさせないように努力した。登校しなかった日には家に行き、その日学校であったことについて話した。学校に行き一緒に過ごしていたように思ってもらえるように、身近なことやその子の友達のことなどを話した。彼女は前よりも学校に来る回数が増え、退学などをすることなく卒業することができた。』

⑥事例6：SNSによる会話のやり取り

『中学3年生の時、同じ班の子が不登校になった。仲が良かった子と嫌なことが続き、そのことが周りに広まって事実とは違う噂が流れるようになったのが原因だったらしいということだった。その子に対して「学校に来て」と言うことはしなかった。不登校になった理由も聞かないようにして、今何が不安なのか何が怖いのかなど、その子の本当の気持ちを自分から話せるようになるまで保健室で一緒にいることやSNSを使って会話のやり取りをしていた。最期までクラスに戻ることはなかったが、同じ班の子とは遊びに行けるようにはなかった。』

⑦事例7：友達の働きかけ、連絡ノート、班全員での訪問

『1年生から不登校であり、2年生に進級した当初からずっと学校を休んでいた子がいた。2年生で同じ班になったので、毎日連絡ノートに明日の時間割と班の各メンバーからのメッセージを書いていく。一番家が近かったためその連絡ノートを毎日家に届けた時に少し話をした。「学校に少しでも来たいと思ったらいつでもおいで」や、「悩みがあったら気軽に何でも話してね」など様々なことを話した。最初は「明日も学校行かな

い、「学校に行きたくない」という言葉しか聞くことができなかったが、そのうちに「今日学校で何をしたの」、「あの行事っていつあるの、何をやるの」など学校に対して興味を持ち始めてくれた。

ある日に班全員で連絡ノートを届けに行こうということになり、行くと彼女はとても嬉しそうな顔をして私たちと話をしてくれた。その翌日からみんなと同じ時間に彼女が登校しているのを見て、私はとても驚きが隠せなかった。また、クラスみんなが彼女のことを心配していること、行事は全員で出たいという気持ちが彼女に届いたようでとても嬉しかった。』

(2) 別室登校や行事のみに参加する生徒に対する声かけや自然な対応（7事例）

別室登校や行事のみに参加する行事型登校の生徒に対する7個の事例で共通に示されているのは、「特別な生徒として扱うのではなく、みんなと一緒に何ら変わらない一人の生徒として接する」（事例8）や「不登校であることを別に意識したり、授業に来ない理由などを根掘り葉掘り聞くのではなく、クラスの友達として普通に接する」（事例9）ことである。具体的には、休み時間に保健室まで会いに行き声かけをする（事例10）、保健室まで給食を届けに行く（事例11）、体育などの参加できる授業では何らかの関わりをする（事例11）、授業に参加した時にはいつも通りに接する（事例12）ことである。

また、行事に参加してきた場合には仲が良かった子が声かけに行ったり（事例13）、修学旅行などの学外行事に参加した場合にも特別な対応をするのではなく、普段通りの普通の対応（事例14）をすることが効果的であることが示されている。

⑧事例8：保健室登校、連絡帳による声かけ、クラスの一員としての対応

『不登校や保健室登校を繰り返している友人がいた。保健室にいる時には何人かの友人とよく声かけに行っていた。教室に入ることはずごく勇気が必要で辛いことだろうと思っていたので、教室に来るように促すことや保健室登校について触れることはしなかった。連絡帳のフリースペースに次の日の授業の内容や行事に合わせて、体育がある日は「一緒にドッチボールできたらいいね」や、図工で絵を描くときがあったら「絵が上手だから、お手本を見たいな」などひとり一言ずつ私たちの思いを伝えた。

担任は授業がない時間や休み時間などには必ず保健室に顔を出し、教室に来るように促すことなく、その時間を利用して勉強を教えていた。特別に彼女にだけ優しくしたり、テストを免除したりすることはなかった。彼女のことを「教室に来られない保健室登校をしている特別な生徒」として扱うのではなく、「みんなと一緒に何ら変わらない一人の生徒」として接していた。このような対応を見ていたことで、私たち生徒も彼女のことを一人のクラスの友人として大切に想い、接することができていた。』

⑨事例9：保健室での級友からの話しかけや自然な対応

『体育祭などの行事には参加するが、保健室にいることが多く、授業には参加しない子がいた。保健室の掃除当番の時に非常に明るく保健室の先生と話しているのを見かけた。その子とはあまり話をしたことがなかったが、話しかけると普通に話してくれた。それ以降、保健室の掃除の時だけだったが、周りもその子と話すようになった。そのうちいつの日か授業にも参加するようになった。不登校であることを別に意識したり、授業に来ない理由などを根掘り葉掘り聞くのではなく、クラスの友達として普通に接したことでクラスに戻る何かのきっかけにつながったのかもしれないと思う。』

⑩事例10：保健室登校に対する班長としての声かけ

『1年生の頃は普通に登校していたが、2年生のクラス替えて仲の良い子と離れてしまったせいか、昼から登校したり保健室で過ごすことが多くなった子がいた。班長として毎日帰り際に「明日も待っているよ」や「明日の体育一緒にペアでやろう」などの言葉をかけることにした。保健室登校してきた時には休み時間に保健室まで会いに行き、「おはよう。2時間目は来れそう」などの声もかけた。「今日はやめとく。ごめんね」などと断られた時もあったが、だんだんと教室に来る回数が増えていった。さらに「いつも気にかけてくれてありがとう」や「この前体育に誘ってくれたから、今日来ることができたよ」などと言ってくれた。』

⑪事例11：保健室に給食を届ける、体育での関わり

『学校には登校しているが、保健室で時間を過ごしたり、校舎内を先生と一緒に探索したりしている同じクラスの子がいた。給食当番の時や先生から頼まれた時は保健室まで給食を届けに行っていた。最初はその生徒と関わりはなかったが、給食を持っていくと「ありがとう」と言ってくれる姿を見て私も嬉しくなった。体育の授業は参加していて、教室での授業は難しいかもしれないが活動する授業は好きな科目だと知ることができた。体育の授業の時に何か関わりが作れたら良いなと思い、ボールを渡しに行った時に授業の流れを教えてあげたら、「ありがとう」と保健室で会った時よりも笑顔で応えてくれた。』

⑫事例12：別室登校に対する普通の対応、給食を届ける

『不登校や欠席がちの子は保健室とは別の場所にある教室にいる場合が多かった。国語や数学などの授業と一緒に受ける事はほとんどなかったが、たまに体育や音楽の授業などに参加することがあった。その時には周りの子は何か言うわけでもなく、いつも学校に来ている子と同じように接していた。給食の時も別の教室にいるため、給食をその教室まで届けに行くということをして、そこでコミュニケーションをとったりしていた。また、業間休みや昼休みなどにその教室に遊びやししゃべりに行ったりしていた。体育祭や合唱、卒業式などの行事の際も一緒に行っていた。』

⑬事例13：行事型登校に対する対応、プラスの発言

『普段は登校しないのに修学旅行や運動会などの行事には参加する子がいた。周りの子は、「なんで行事だけ来るの？」などのマイナスな事は言わず、「久しぶり」や「少し見た目が変わったね」など、今までのことを否定することなく、プラスな発言をするという対応をしていた。』

⑭事例14：修学旅行での普通の対応

『中学生の時に不登校だった子がいた。その子は修学旅行の少し前から急に登校し始めたため、周りは少し動揺し気も遣ったが、楽しく話したり写真を撮ったりした。学校へ来ても先生は特別扱せず、周りの子も自然に受け入れて接していた。修学旅行はその子と同じ班だったが、3日間一緒に楽しく過ごすことができた。』

(3) 登校してきた時の周りの自然な対応（5事例）

不登校の生徒が登校を再開した時の望ましい対応として、事例15～19に共通しているのは、特別なことをするのではなく、普段通りの対応をすることである。具体的には、近くの席の子や気づいた子が率先して声をかけたり優しく教えて一人にさせない（事例15）、学校を休んでいた理由を聞かないでそれまで通りに接する（事例16）、他の友達に接するように普段通りの声かけやペア学習を行う（事例17）、普通にグループワークをする（事例18）などである。また、事例19では、校外研修で初めて顔を出してきた生徒に対してもクラスメイトとして普段通りの対応をしたことが述べられている。

⑮事例15：登校してきた時に率先して声かけ、一人にさせない

『不登校や欠席がちの子に対する周りの対応として、学校の配布物などプリントと一緒に班の子やクラスの子が手紙を書いて週に一回それらを届けていた。また、学校に来てくれた際には、クラスのことや勉強のことなど学校生活において分からないことが多いため、近くの席の子や気づいた子が率先して声をかけたり優しく教えていた。せっかく勇気を出して学校に来てくれているので「明日もまた学校に来ようかな」と思ってもらえるように、学校で孤立感を覚えたり寂しい思いをしたりしないように、なるべく一人にさせないようにしていた。』

⑯事例16：突然の再登校、特別なことはしない

『中学1年生の時、一番仲が良かった女友達がある日を境に学校に来なくなった。担任に相談したところ、「理由は聞かないで、今日学校であった楽しかったことや嬉しかったことを話してあげて」と言われ、気になっていた不登校の理由を聞くのを止め、学校であったことを毎週金曜日に電話で伝えることにした。

ある日突然その子が登校してきた。なぜ急に学校に来たのかと驚いたが特別な反応をしらず、それまで通りに接することにした。学校を休んでいた理由を直接尋ねている子もいたが、その子はバツが悪そうな反応

だったため、理由は聞かないほうがいいと思った。担任は特別な反応はしないで、他の生徒たちと同じ接し方をしていた。それからは学校に来ない日もあったが、学校に来る頻度が高くなり、2年生になる頃には休むことがほとんどなくなっていた。』

⑰事例17：欠席理由を問い詰めず、普通に挨拶や声かけ、ペア学習

『同じクラスに欠席しがちの子がいた。その子は昼から来るときもあれば数日来ないこともあり、欠席の理由はよくわからなかった。そのうちクラスの誰も関心を向けなくなっていたが、ある日いつも通りの時間を過ぎた頃に急に登校してきた。班の子たちは特に理由を問い詰めたりせず、「おはよう」と挨拶をしたり、課題のプリントを渡したりしていた。他の友達に接するように普段通りのペア学習や声かけをしたりして、授業を一緒に受けていた。次第に欠席が少なくなり、毎日登校をするようになり、約1年後には友達と笑っている姿が見られた。』

⑱事例18：普通にグループワーク

『中学3年生の時、同じクラスの子が相談室登校していた。初めの方はまったく教室には来ず、相談室だけで過ごしていた。担任が無理に教室にさせようとするのはなかったが、声をかけて途中からは決まった教科だけ、1日1教科だけ、給食の時間だけというように短い時間に教室に来るようになった。その子が教室に来るようになった時、グループワークなどを周りの子と一緒にに行っていたが、「なんで教室に来ないの？」と聞く子もおらず、みんな普通に他のクラスのメンバーと同じような関わり方をしていた。』

⑲事例19：校外研修での級友の普段通りの対応

『中学1年生の校外研修の時に初めて顔を見た子がいた。研修前に担任から「これまで1ヶ月に数回、保健室に来てはいたのだけど、校外研修のとき初めてみんなの前に来ることができるかもしれないからよろしく」という説明があった。その説明を聞いて「なんで授業は休むのに、楽しいときだけ来るのだろう」と思った。しかし、実際に会ってみるとすごく良い子で、学校に来られないということ以外は私たちと何も変わらないと感じ、会う前に感じていた戸惑いは少なくなっていた。普段の休み時間には授業の話や先生の話をしたりするが、校外研修の時はその子が話しやすいように、みんなでその子が見ていたアニメの話や夢中になっていることなどを話した。また、先生の話や学校の話をする時もきちんと説明してその子が話についていけるようにした。後日その子のお母さんから御礼があったということを知った。』

考 察

1. 不登校に対する望ましくない対応について

今回の調査で得られた結果から、不登校に対する望ましくない対応として、周りの生徒が不登校に関する知識が不十分なことから、不登校生徒に対し「怠けである」、「楽をしている」、「自分勝手である」などの否定的な見方や偏見を持ち、不登校生徒を特別扱いしていることが挙げられる。それは特に保健室や相談室などの別室登校や、運動会や修学旅行などの行事には参加してくるという行事型登校の生徒に対して顕著であった。周りから不登校について特別視されていること、不登校について理解してもらえないことから、ますます登校することやクラスに入ることが難しくなる。また、登校した時に周りがコソコソと話をしたり、変にぎわついたりして、その生徒を特別視するような雰囲気を作り上げてしまうことによって、登校してきたことがかえってマイナスになる。さらに、不登校生徒に対しどのような対応が良いのかが分からなかったことから関わりが減少し、結果的に不登校の生徒と周りが疎遠になり、欠席が続くことになる。

文殊(1996)によれば、中学生は不登校が主に人間関係から生じているとみなしており、不登校生徒をかなり否定的に捉えていることが示唆されている。文殊・日高(1996)による調査でも、「学校が面白くないので行きたいと思えないでいる人」、「怠けて学校に来ない人」、「学校に

不満があって休んでいる人」、「突っ張って学校に来ない人」というように、不登校は怠けや学校への不適応、逃避であり、何らかの精神的問題から生じていると捉えられている傾向があった。

文部科学省（2003）は、不登校児童生徒の支援の方向性として「不登校への対応の在り方について（通知）」を提示している。その中で「不登校については、特定の子どもに特有の問題があることによって起こることではなく、どの子どもにも起こりうることとして、学校はすべての子どもが不登校になる可能性のあることを理解し、不登校児童生徒への支援に取り組むこと」の必要性が指摘されている。

しかしながら、文部科学省のこの通知から約20年が経過した今回の調査において、不登校に対する否定的な見方や偏見が生徒の間には現在でも根強く残っていることが分かる。この偏見や認識不足によって周りが不登校生徒を特別視した対応をしてしまうことが、不登校の改善を大きく妨害している要因の一つになっていると考えられる。今後の各学校における不登校支援として、まず第一に不登校に対する一般生徒の偏見や認識不足を改善することが必要である。

2. 不登校に対する望ましい対応について

本調査における望ましい対応では、配布物を届けに行った時に趣味についての話をしたり、最近の出来事や学校であったことなどについて話し相手になるなど、不登校であるからという特別扱いをするのではなく、周りがこれまでと変わらずに対応すること、LINE や SNS によるやり取りなど何らかの関わりを持つことによって他の生徒との繋がりを保っていることが重要であることが示された。保健室登校や行事型登校の生徒に対しても、特別な生徒として扱うのではなく、他の生徒と何ら変わらない一人の生徒として接することが基本となる。また、授業に出ない理由などを掘り葉掘り聞くのではなく、クラスの友達として普通に接することが必要となる。不登校の生徒が登校を再開した時にも、特別なことをするのではなく、欠席前と変わらない普段通りの対応に心がけることである。

原田ら（2022）による、不登校サポートセンターの支援を受けて学校復帰を果たすことができた児童生徒に対する調査では、登校できなかつた時にしてほしかった支援で最も多かったのが「様子を見て話しかけるが、登校を促したり非難したりしない」であった。これに続いて「子どもの訴えや悩みに耳を傾ける」、「保健室や別室などの居場所を作って登校しやすいように学校の環境を整える」が挙げられていた。鈴木（2009）による不登校を経験した生徒が学校や教室で困っていたこととして、「グループに入れなかったら一人になってしまう」、「なかなか友達が作れなくて毎日が不安だった」、「自分が周りになじめずに一人であることが多かった」、「自分の居場所がなかった」などの教室内の疎外感が挙げられていた。このような疎外感を減少させるためにも特別扱いをしないで普段通りの対応をすることが必要であると思われる。

以上の研究を踏まえて、本調査で得られた不登校に対する望ましい対応をまとめてみると、先に述べた望ましくない対応と全く逆関係にあることが分かる。保健室登校や行事型登校、再登校の場合を含め、不登校に対して偏見を持って特別扱いをすることは望ましくない対応に繋がり、偏見を持つことなく普段と変わらない自然な対応をすることが望ましい対応になる。

3. 不登校生徒の支援に対する提言

文珠・日高（1996）による調査では、不登校生徒と関わりを持たなかった理由として「普段から関わりがないから」、「その子に関心がなかったから」、「クラスが別だった」などの理由と共に、「何をしていたかわからなかった」、「何かしたい気持ちはあったが行動する勇気がなかった」という戸惑いが挙げられていた。本調査でも、望ましくない対応として挙げた「対応方法が分からないことから、関わりを避けるように」（事例19）と「対応が分からず気を遣うのが裏目に出て、次第によそよそしく」（事例20）から分かるように、不登校生徒に対する対応の仕方に対する適切な知識がないことによって、望ましい対応ができなかったことが示されている。一方、望ましい事例（事例8と16）では、生徒は不登校生徒に対する対応が分からなかったが、担任からのアドバイスで声かけが行われたことが語られていた。

櫻井（2011）は、本当はあまり学校に行きたくないのに親や先生に促されて登校していたり、「学校は行くべきところだ」という社会意識から登校している子どもは、不登校生徒に対して批判や羨望の気持ちを持つ傾向があることを報告している。一方、友人や教員と比較的良好な関係にあり学校に一定の魅力を感じている子どもは、不登校生徒を心配したり「早く学校に戻ってきてほしい」という思いをより強く抱く傾向があるという。この櫻井の指摘にしたがえば、特に不登校生徒に対して批判や羨望の気持ちを持ちやすい生徒に対して、不登校に対する正しい知識を与えることが重要となる。

保健室登校の生徒にどう対応したらいいかわからないと悩んでいる養護教諭（伊藤，2003）や、生徒との距離の取り方に悩みを抱えている若い中学校教員（都丸・庄司，2005）について報告されているように、生徒に対する支援は教員にとっても難しい問題である。そのようなことから専門家であるスクールカウンセラーに対する期待は大きい。しかし、スクールカウンセラーや教員による支援と同様に、あるいはそれ以上に大事であるのは、毎日と同じ集団で一緒に生活をしているクラスの仲間からの働きかけである。そこで、不登校生徒に対して批判や羨望の気持ちを持ちやすい生徒（櫻井，2011）だけでなくすべての生徒に、不登校生徒に対して欠席の理由を問ひ詰めない、特別扱いをしないで普段通りに接するなどの基本的な対応方法を教えていくことが、不登校生徒に対する望ましい支援を広めることに役立つのではないと思われる。

引用文献

- 原田直樹・梶原由紀子・田原千晶・増満誠・松浦賢長（2022）. 元不登校児童生徒とその保護者の不登校をめぐる意識差と家族機能についての研究 福岡県立大学看護学研究紀要, 19, 1-12.
- 伊藤美奈子（2003）. 保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識—スクールカウンセラーとの協働に注目して— 教育心理学研究, 51, 251-260.
- 笠井孝久（2001）. 不登校児童生徒が期待する援助行動 千葉大学教育学部紀要（教育科学編）, 49, 181-189.
- 岸田幸弘（2012）. 不登校児童生徒への支援に関する教師の意識調査 学苑（昭和女子大学）, 856, 28-36.
- 文部科学省（2003）. 不登校への対応の在り方について（通知） 文部科学省初等中等教育局長 矢野重典 平成15年5月16日

- 文部科学省 (2022). 令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 令和4年10月27日
- 文殊紀久野 (1996). 不登校に関する研究—中学生が見ている不登校— テレビ山梨サイエンス振興基金研究報告書, 6, 47-52.
- 文殊紀久野・日高潤子 (1996). 不登校に関する研究—大学生からみた不登校— 山梨県立看護短期大学紀要, 1, 89-96.
- 櫻井裕子 (2011). 中学生が考える『学校』と『不登校に対するイメージ』について 奈良女子大学社会学論集, 18, 181-196.
- 鈴木誠 (2009). 不登校を経験した中学生が求めているものは何か 大正大学大学院研究論集, 33, 242-256.
- 高信智加子・下田芳幸・石津憲一郎 (2013). 中学校教員の不登校支援に関する実態調査 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 7, 21-26.
- 都丸けい子・庄司一子 (2005). 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究 教育心理学研究, 53, 467-478.
- 山本奨 (2007). 不登校状態に有効な教師による支援方法 教育心理学研究, 55, 60-71.
- 安原直見・進藤貴子 (2021). 教室復帰に必要な友人サポートの検討—中学生・高校生時代に別室登校経験を持つ大学生の例— 岡山心理学会第69回大会発表論文集, 35-36.

(受理日 2022年12月15日)